

観光を通じて勝沼地域の魅力を繋げるために

高橋 瑞季

山梨大学生命環境学部地域社会システム学科4年

1 勝沼地域とかかわって感じた魅力

私は山梨県内に実家がありながら、勝沼地域を文化的景観調査まで訪れたことはなかった。そのため、道の右を向いても、左を向いてもブドウ畑が青々と広がっていることに驚いた。勝沼地域がブドウの有名な産地であるということは知っていたものの、実際に訪れるまで勝沼地域のことを本当に「知っている」わけではないと気付いたのである。

大学における専門のひとつとして、また、就職という進路としても、地域づくりという分野を志すことになったのは、大学生活のほとんどで関わってきたこの勝沼地域のおかげであった。大学生活で携わった文化的景観の調査やその関連事業を通じて、地域を「知る」ことやそのために必要な視点、知った地域に対してその魅力を伝えることの楽しさ・難しさを考えることとなり、私の考え方を大きく広げていくきっかけとなったのである。

勝沼地域の魅力は、おしゃれさだけでなく親しみやすい観光地であることと私は考える。ブドウやワインは、西洋風の潇洒なイメージを私はもつ。しかし、勝沼地域はそのブドウやワインを主産業としている日本の農村であり、商売っ気のある雰囲気のある観光ブドウ園と、上品な雰囲気のあるワイナリーが違和感なく解け合っている地域であると思う。ワインは当初地域住民が飲んでいただけで、私のもつブドウやワインのイメージは崩れ、むしろ庶民的なものであるような気がしてきていた。確かに、ブドウ畑を眺めながらワインを優雅に飲むのも素敵であるが、原色の目立つ幟が立つ観光ブドウ園を訪れ、さまざまな品種を前にたくさん試食したり、ブドウを買うのも同じくらい魅力があると感じる。勝沼地域は、おしゃれさと親しみやすさが同居しているのである。

このように、文化的景観調査を通じて私は勝沼という地域を知り、さまざまな地域にあるそれぞれの魅力を伝えられるような地域づくりを考えたい、そして、今のささやかな当たり前を残していきたいとも感じるようになった。

2 勝沼地域における文化的景観の保存活用策のひとつとしての観光

(1) 文化的景観調査から卒業論文へ

勝沼地域は戦後観光地として大きく発展し、現在においてもブドウやワインを中心とした観光産業は、地域住民の生活と一体不可分のものである。そのため、文化的景観としてもブドウやワインにまつわるストーリーは、観光客にとっても目にみえる形で分かりやすく、上記で述べたような勝沼地域の魅力を伝えることと繋がりやすい。文化的景観の制度は地域資源の価値を整理し、ストーリーとしてブドウなどの観光資源とセットにして観光で活用することで、勝沼地域の新しい観光のかたちをつくることができると考える。

文化的景観の調査を通じて、卒業論文では勝沼地域の観光地としての現状や今後について考えたいと思うに至った。

そのため、高付加価値の果樹を観光資源とする地域における、来訪者の特性と地域の多様な魅力の発信を前提とした観光地マネジメント手法について、特に域内交通という観点を中心に考察することを目的に、①勝沼ぶどうの丘における観光客向けのアンケート調査を通じた観光客の食への志向性、来訪目的、観光行動などの相関性に関する分析、②レンタサイクル「ぐるりん」利用者の行動特性の分析をおこなった。

以下に、これら2つのテーマで分かったことを簡潔に述べるが、より詳細な論文の内容については附録の卒業論文梗概を参照されたい。

(2) ぶどうの丘での観光客向けアンケート調査の実施から見た勝沼地域の現状と課題

まず仮説として、日常の食生活の嗜好（ブドウをよく食べている、ワインをよく飲んでいるなど）が、観光の動機として強く働くのではないかと考えた。それをもとに、日常の食生活と観光動機の関係性を明らかにするため、ぶどうの丘にて来訪者へのアンケート調査をおこなった。なお、質問内容は、①ブドウ及びワインの日常的な摂取に関する設問、②勝沼を訪れた来訪目的に関する設問、③交通手段や観光ルートといった当日の観光行動に関する設問に、来訪者の属性を設問項目として加えている。

アンケートの分析から、来訪者の日常的な食生活に関して、ブドウの品種やワインの産地に特にこだわりのない層が中心であることが分かった。また、ブドウの品種についてはリピーター層のほうが顕著に高く理解していた。来訪目的では、ブドウ狩りやワインの試飲が上位を占めているが、リピーター層ではブドウやワインの購入が多いことがわかった。また、現地での訪問先では、自動車を中心とした観光形態ではワイナリー、観光ブドウ園など、全域に広がる多様な観光資源に対して十分な回遊性を持たないことがわかった。

以上のことから勝沼地域の課題として、観光行動はむしろリピーターであるほどブドウやワインの購入といった勝沼地域の魅力を堪能しているとはいえない行動に収束していること、行動範囲においても、ぶどうの丘を中心に狭い範囲で移動している傾向が強いことから、勝沼地域全域への高い回遊性を持たせるような仕組みをつくることが考えられる。

(3) レンタサイクル「ぐるりん」の利用状況・可能性・課題

レンタサイクルに代表される自動車以外の域内交通手段は、地域の魅力を積極的に発信し、観光対象を点から面へと展開するための仕掛けのひとつとして有効であることから、現在、甲州市によって運用されているレンタサイクルシステム「ぐるりん」に着目し、利用時に得られた移動軌跡データ（GPS座標など）をソフトウェアを使用して解析することで観光客の行動特性を分析した。

その結果、1年を通して勝沼地域全体を回遊しているものの、主要な観光スポットを点から点へと移動するような状態であることが明らかとなった。また、繁忙期では特定の場所が

訪問先に集中しやすく、その他の時期ではワイナリー中心ではあるが多様な場所を来訪していることもわかった。

今後、勝沼地域の多様な魅力を観光客に発信していくためには、観光客の地域全体に回遊する仕掛けが不可欠であり、レンタサイクルの最適なスポット数などの整備や、それを運営する組織の在り方などより具体的かつ実務的なマネジメント手法をあわせて検討することが求められることが指摘できた。

3 勝沼地域の観光と文化的景観の役割

文化的景観の地域の歴史や文化などのストーリーは、観光資源としての付加価値を高めるうえでより魅力を向上させることに加えられると考えられる。勝沼地域においては、文化的景観として語るうえで観光は外せず、その観光も文化的景観は受け継ぐためのひとつのツールになりうると思う。文化的景観の主たる担い手は地域住民であるが、地域を訪れる観光客をはじめとした来訪者（交流人口）も、文化的景観の保全に対して役割を担うと思う。時代を経てさまざまな人々の手で作られたものを保存するだけでなく、今を生きる私たちも活用し、将来に繋げていくことは、大切なことであると感じる。

学生生活を通して、勝沼地域の歴史や文化、ブドウやワインに携わる地域住民を知り、文化的景観の制度について理解を深め、地域づくりを考えるきっかけとなった。勝沼地域での4年間の取り組みをきっかけに、大学卒業後も地域づくりに携わる職を得ることができたため、今後も勝沼地域での経験を大切にしながら、さらに実践を重ねていきたいと考えている。